

## 主の変容 (マタイ 17:1-9)

イエスみずから近づき、恐れを取り除いてくださる



聖書愛読が始まりました。戸惑いの中でのスタートでした。主任司祭の指導力不足もあったと思います。詩編朗読は、かたまりことに、例えばオルガン側が先に読み、朗読台側が次を読みます。こうして、詩編を読むことと、詩編に耳を傾けること、両方を深めることができます。

予定では今後四年間、詩編を聖書愛読の材料に使います。その中で詩編の特徴や、どの詩編がどの典礼聖歌に使われているのか、詩編をより身近に感じられるようになると思っています。詩編をすべて読み終える経験は、生涯にわたる貴重な経験となるでしょう。

期間中、主日のミサが長いと感じるかもしれないので、主任司祭も協力しようと考えています。説教は短かめにして、奉献文も聖書愛読期間中は第二奉献文にします。これでかなりコンパクトになるでしょう。

イエスの姿が変わる場面が福音朗読に選ばれました。イエスの姿がこの世のものとは思えないものになっていった。これはイエスが「人間の姿」から「神の姿」に変わっていったということでしょう。イエスはまことの神・まことの人です。イエスが望めば、望みのままに、より神の姿を強調したり、より人間の姿を強調したりできるわけです。ここでは、より神の姿が強調されました。

私たちはどうでしょうか。ペトロと仲間たちが光り輝く雲に覆われ、「これはわたしの愛する子、わたしの心に適う者。これに聞け」(17・5)という声が雲の中から聞こえたとき、弟子たちはこれを聞いてひれ伏し、非常に恐れたのです。人が、ほんの少し神の側に近づいただけで、恐ろしさを感じてしまうのです。

だからこそイエスは、みずから弟子たちに近づいてくださるのです。神が人間に近づいて、恐れを感じる神と人との間の距離を近づけてくださるのです。私たち人間が決して埋めることのできない距離を、イエスが埋めてくださいます。

典型的なのは「死」の神秘です。私たちはいつかこの地上の生活を終えなければなりません。そのときが近づいてくると、多く的人是は恐れを感じます。より神に近づくはずなのに恐ろしいのです。この距離を埋めることができるのはイエスただ一人です。イエスだけが「わたしは復活であり、命である。わたしを信じる者は、死んでも生きる」(ヨハネ 11・25)と約束してくださる方なのです。

イエスが私たちに近づいてくれなければ、私たちが人生で感じる恐怖を乗り越えることは非常に難しい。難病を発症したり重大な交通事故に遭遇したりして、思い描いていた人生が見通せなくなることもあります。そうした恐怖を、イエスはみずから近づいてくださり、「恐れることはない」と力づけてくださいます。

8月6日、広島原爆の日、9日は長崎原爆の日です。数え切れない人が恐れに捕らえられたでしょう。人が恐れを感じる時、そのときこそイエスがみずから近づいてくださり、力づけてくださるときなのです。「起きなさい。恐れることはない。」(マタイ 17・7)

年間第19主日(マタイ 14:22-33)